



2016 SUPER GT Rd.6 SUZUKA 1000km  
ORDELAS IN SUMMER  
「夏の終わりと巡る季節」

**ARTA**  
AUTOBACS RACING TEAM AGURI  
**Project**



夏の風物詩として名高い鈴鹿1000kmレースは、今年も多くのファンに迎えられた。

戦う者たちの気持ちとしても、破格の長丁場に厳しさを覚悟しつつも、

何かが起こるかもしれないといういつものレースとは違った祭りのような気分もどこかに漂う。

その熱気とは裏腹に、今年の鈴鹿1000kmは曇天に支配された。

決勝の直前には雨粒が落ち、アスファルトを濡らす。

本来なら不穏な気配とも言うべきそんな不安定な空模様を、ARTAの面々は密かに歓迎していた。





前戦富士で優勝した55号車ARTA BMW M6 GT3には、74kgものハンディウエイトが搭載されている。さらには性能調整と称してターボ過給圧を下げられてしまい、運動性能だけでなくパワーまで奪われてしまったのだ。予選24位という結果が、その厳しさを物語っていた。一方、徐々にパフォーマンスを高めてきた8号車ARTA NSX CONCEPT-GTは、予選で5位を獲得する力走を見せた。1000kmという距離を前に、何かを期待せずにはいられなかつた。



「ねえコースケ、聞こえる？ 映像を見る限りでは路面はほとんど乾いてるよ」

スタートを前に、グリッドに就いた松浦孝亮に鈴木亜久里監督が伝えた。

55号車陣営の願いは虚しく、スタート直前になって雨は上がってしまったのだ。

間もなく長いレースのスタートが切られ、55号車のステアリングを握る高木真一は

下位集団の中で悲痛な叫びを上げた。

「ストレートが遅すぎる！」「アンダーも出るけど、オーバーの方がキツいな。

立ち上がりでアクセルを踏むとすごくリアが出てオーバーになっちゃう」



パワーも、マシンバランスも、充分ではなかった。

今まで戦ってきた場所が場所だけに、ドライバーズサーキットの鈴鹿で本領を発揮できないのはもどかしくて仕方がなかった。

「真一、1000kmは長いから。我慢して走って！」

エグゼクティブアドバイザーの土屋圭市がなだめるように無線で伝えた。

「2時間後に雨が来る予報があります。なので、できるだけ引っ張る方向で考えています」

エンジニアの一瀬俊浩が雨雲レーダーを見て天気予報を伝える。

それを聞いて、高木は天の恵みとばかりに喜ぶ。

「いいね！ 頑張りますよ～。このマシンバランスだとドライはちょっと厳しいね……雨来て欲しい……」





一方、スタートで4番手に順位を上げた8号車の松浦は、徐々にペースを落としていた。

タイヤにタイヤカスが付着し、グリップが著しく失われていたのだ。

「結構クルマが滑りはじめた。ひょっとしたらピックアップしてるかもしれない」

「完全にピックアップしてる！ めちゃくちゃ乗りづらいよ！」

松浦は立て続けに報告を上げてきた。しかし、チームとしてもどうしてやることもできない。

「同じタイヤを履いてる小暮は53秒台、このくらいのペースなら取れてくるのかもしれない」

エンジニアの星学文がアドバイスを送るも、松浦もそんなことは百も承知だった。

「今頑張ってプッシュしてんだけどさあ……」

「早く（ピットに）入れて欲しい。どんどんひどくなっているよ……」



・亞久里監督も「このペースだったら早めに入れた方が良いんじゃない？」  
とピットウォールの星に伝え、8号車は野尻智紀にバトンタッチすることになった。  
野尻は1分54秒台のペースで安定した走行を見せ、ホンダ勢の中でもトップクラスの速さを維持した。  
55号車もピットインして小林崇志に代わり、各車が第2ステイントを戦う中で、待望の雨が降ってきた。  
エンジニアの一瀬と小林が細かく無線でやりとりしながら、タイヤ交換するかしないかの判断を探る。  
「今ストレートで雨が降ってきた。ここから20分間は雨雲の下だと思う」  
「了解。西コースもちょっと雨降ってます」



「ストレートは結構降ってきた」  
「路面状況を逐一教えて」

「S字は曲がらない。もう結構グリップ落ちてる」  
「ピットインの判断は小林さんに任せるからね」

「ちょっと難しいな。これで降り続けるんだったら入りたいけど、多分これ通り雨だよ」  
その読み通り、雨は本降りになることなく上がりてしまった。

55号車にとってのチャンスは、逃げていってしまった。  
「東コースは濡れてるけどまだ色が変わらほどじゃないから、これ雨がやんたら一瞬で乾くよ。デグナーはもうやんだ。西コースももうやんでるから多分もう降らないね」





再び高木にバトンタッチして周回数が80周目を超えたところで、  
GT300のマシンがS字でクラッシュしてセーフティカーが導入された。

「今トップから2周遅れなの？」

「はい、2周遅れです」

「マジっすかあ～……」

55号車に上位争いをするチャンスはもはや残されてはいなかつた。

2周も遅れてしまうと、どんなチャンスが巡って来ても同一周回には戻ることができないのだ。

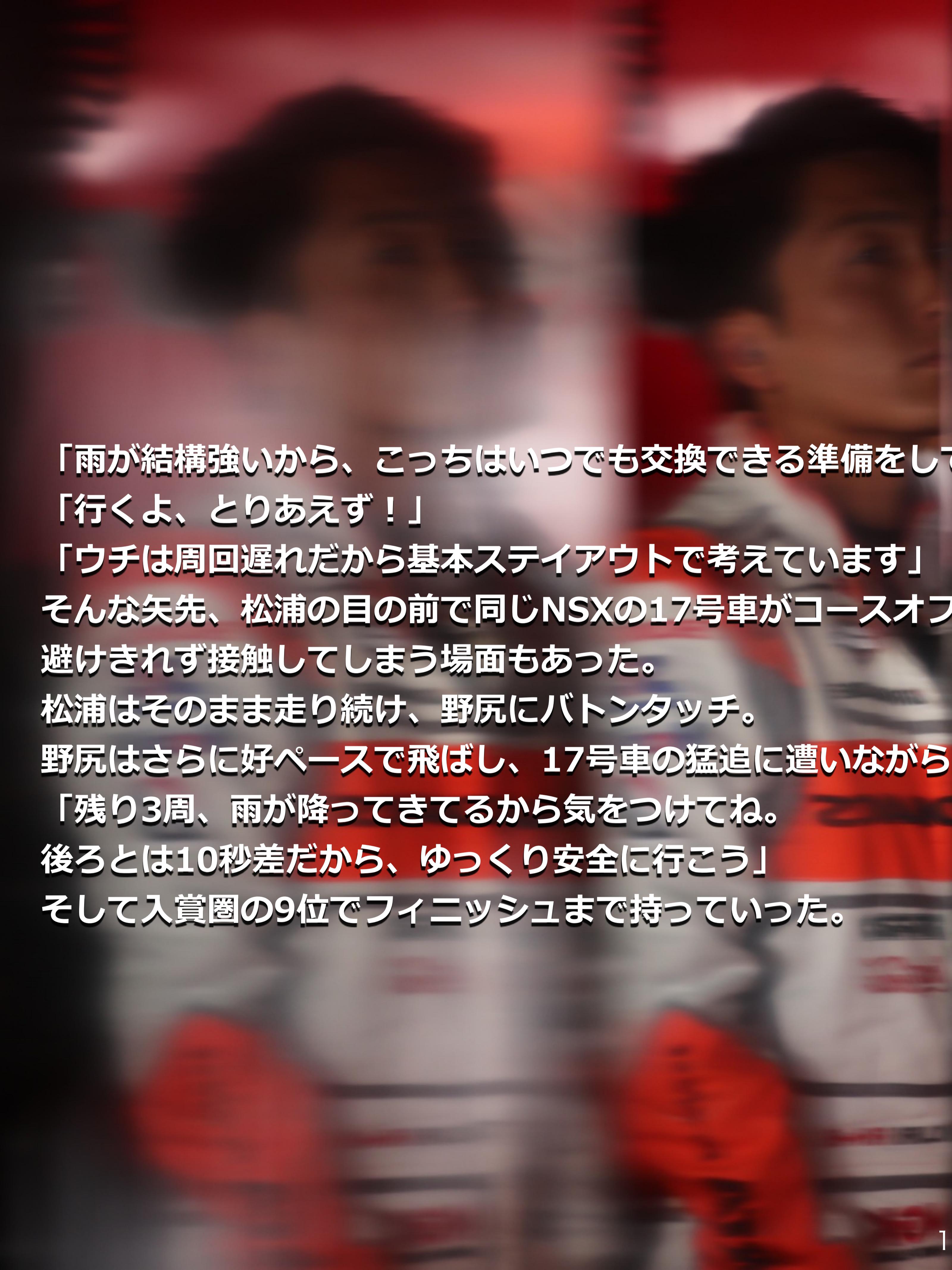
そして、8号車にとってはこのセーフティカーが最悪のタイミングで導入されてしまった。

野尻から松浦、そしてまた野尻に代わった直後。

一時的にトップから周回遅れになったタイミングでSCに捕まってしまったのだ。



「もしかして（前を走っている）38号車がトップってこと？」  
「そう、38号車がトップだから、タイミングが悪いね……」  
順位を争っていた他車の中には、このセーフティカーで  
ほとんどタイムロスなくピットストップを済ませて同一周回で戻り、  
隊列の後ろにいたマシンもある。早めのピットストップが裏目に出てしまったのだ。  
これで8号車も上位進出のチャンスはなくなってしまったが、  
それでも野尻から第5ステイントのステアリングを託された松浦は諦めずに走り続けた。  
時折コースの各所ではオイルフラッグが振られ、  
局地的な雨が降っていることを知らせるような、難しいコンディションだ。



「雨が結構強いから、こっちはいつでも交換できる準備をしています。そのまま行けそう？」  
「行くよ、とりあえず！」  
「ウチは周回遅れだから基本ステイアウトで考えています」  
そんな矢先、松浦の目の前で同じNSXの17号車がコースオフし、  
避けきれず接触してしまう場面もあった。  
松浦はそのまま走り続け、野尻にバトンタッチ。  
野尻はさらに好ペースで飛ばし、17号車の猛追に遭いながらも凌いでいった。  
「残り3周、雨が降ってきてるから気をつけてね。  
後ろとは10秒差だから、ゆっくり安全に行こう」  
そして入賞圏の9位でフィニッシュまで持つていった。





「野尻、お疲れ様」

亜久里監督が声をかけ、星もセーフティカーのタイミングを悔やんだ。

「レースペースもそんなに悪くなかったのにね、

SCのタイミングが悪かったよね……」

しかし、8号車NSX CONCEPT-GTが着実に進歩していることは明らかだった。

1000kmという長丁場を戦い抜き、結果こそついてはこななかったが、

チームにとっては充分に価値ある内容がそこにはあった。

一方レース中盤、55号車はなんとか雨を味方に付けようと最後のギャンブルを狙っていた。

「ホームストレート上、今結構雨が降ってきた。小林さん、入ろう、ウェットにしよう」

一瀬からの無線に、小林が悔しそうに言う。

「もうちょっと早く来て欲しかったあ～。でもS字はあまり降ってないよ」

ピットインをためらう小林に、土屋が背中を押す。

「小林さあ、今13位なんだよ。このままいつてもノーポイントなんだよ。

だから賭けに出ようよ」

しかし、一度はそう決めたものの、雨脚は再び弱くなっていく。

「小林さん、ストレートは雨がやんじゃった。もう少しステイアウトしようか」

「厳しいなら入って良いよ。

どっちにしてもこのままじゃノーポイント何だから。小林に任せるよ」

一瀬と土屋からの無線に、混乱した小林が珍しく声を荒げる。

「どっちなの!? 入るの!? 入らないの!?

「ストレートは弱くなっちゃったから、ステイアウトはしてほしいわけよ」

土屋からそう言われて、小林も納得した。

「今S字もそんなに降ってない。レーダーで雨雲がないんだったらドライでいいよ」

そして一瀬が最後に決めた。

「ダメだ、雨雲がないからドライにしよう」

空模様は最後まで55号車の味方をしてはくれなかった。



その後、小林から高木、そして最後は再び小林へと第6ステイントのドライバー交代をして、  
チャッカ一度フラッグを受けた。

「小林さん、チェック受けました。お疲れ様でした」

「お疲れ様でした、ありがとうございました」

13位という結果は、決して満足のいくものではない。

しかし、これだけのハンディを背負ってしまえば、これ以上為す術がなかったのも事実だ。

「言い訳になってしまいけど、ドライバーもチームもクルマも非常に良い状態に仕上がってきているので、悔しいね」

土屋の言葉には、やはり悔しさが隠しきれなかった。

それでもこの悔しさをバネに、次のタイラウンドに向けて小林は闘志を燃やしている。





「次のタイは良い走りが出来ると思うので、しっかりポイント獲って、  
ランキングトップに返って、最終戦でチャンピオンを決めたいと思っています」  
8号車の方も、もう少しで結果に手が届きそうな予感がしている。

「色々なことの積み重ねで周回遅れになってしまったんだけど、ペースは悪くなかったね。  
このちょっとしたことの差が大きな差になってしまうので、  
この辺をうまくまとめていければトップ争いに加われると思う。

徐々に歯車が合い始めてきたから、残りの3レースはこれをカタチにしたいね」  
亜久里監督は夏の風物詩鈴鹿1000kmをそう締めくくった。

夏は終わり、秋がやってくる。  
実りの季節に、どんな収穫を手にできるのか。全てはARTAの面々にかかっている。

# RESULT

## GT500

ARTA NSX CONCEPT-GT

松浦 孝亮 / 野尻 智紀



公式予選	決勝	TIME DIFF	BEST LAP	ドライバーズランキング
5位	9位	2 Laps	1'51.067	13位

## GT300

ARTA BMW M6 GT3

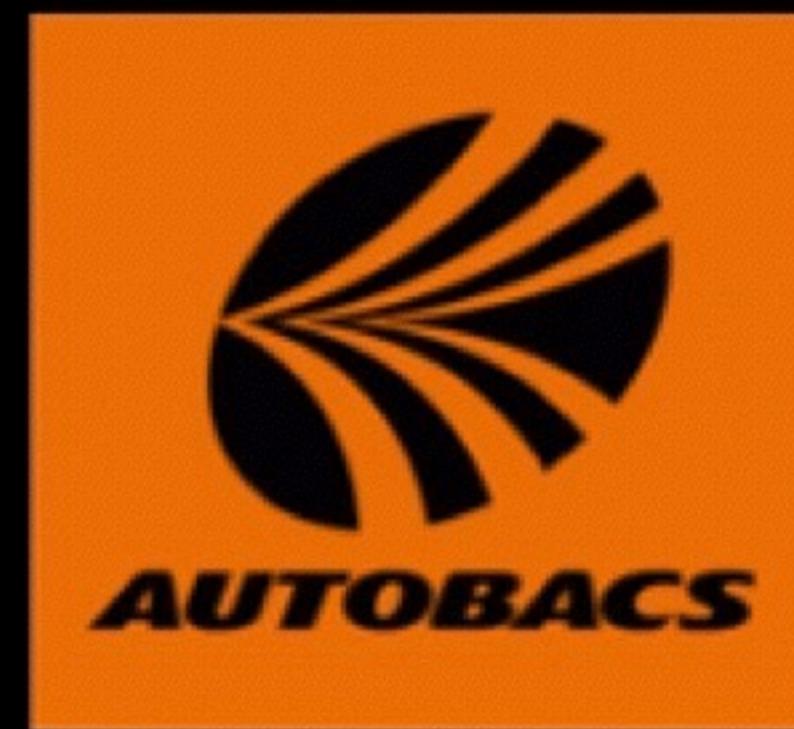
高木 真一 / 小林 崇志



公式予選	決勝	TIME DIFF	BEST LAP	ドライバーズランキング
24位	14位	3 Laps	2'02.487	5位







株式会社オートバックスセブン



ARTA Project



ARTA DIGITAL  
Youtubeチャンネル

To be continued next race....



Copyright c2014 ZEROBORDER INC. All rights reserved. No reproduction or republication

Director and Photographer : Masakazu MIYATA  
Text : Mineoki YONEYA  
Design and Web Creator : Akira YOSHIDA

Special Thanks : AUTOBACS SEVEN CO.,LTD